

日風堂

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉

第84号 2013年12月1日



左から後列：浜松張り子(静岡県)/下総張り子(千葉県)/木曾駒(岐阜県)/きびがら細工(栃木県)
中列：相良土人形(山形県)/白根張り子(神奈川県)/三春張り子(福島県)/肥後ぼした馬(熊本県)/チャグチャグ馬(岩手県)
前列：香泉人形(高知県)/のごみ土鈴(佐賀県)/奈良の一刀彫(奈良県)/赤坂土人形(福岡県)/那智の豊年馬(和歌山県)

資料見聞

馬の郷土玩具

郷土玩具の多くは木や紙、土といった身近な材料で作られています。そうした材料に注目して、山崎茂さんのコレクションから来年の干支「午」にちなむ馬の玩具をみていきましょう。

木の馬は、チャグチャグ馬(中列右端)をはじめ角張った形をした木彫りが多いようです。ナタやノミでスパツと削ったような側面が、馬の輪郭をすっきり描いています。

紙の馬は軽さが身上です。下総張り子(後列左から2つ目)の馬のように首を振るものは、紙の軽やかさが特に活かされています。

土の馬は、張り子の馬と同様に丸味を帯びています。のごみ土鈴(前列左から2つ目)はパツと見、丸すぎて馬とは思えないほどですが、かわいさです。また、土の馬は細かいところまで作り込まれた華麗なものがみられる一方で、赤坂土人形(前列右から2つ目)などは形も色もシンプルな極みです。

きびがら細工(後列右端)は、特産品の箒ほうりの落し草で作られています。暮らしの中から選ばれた材料ですが、細い脚でいかにも速く駆けだしそうです。材料による形の違いもおもしろく、郷土玩具の馬は、私たちにさまざまな表情をみせてくれます。

(中村)

企画展

おもちゃの牧場

千支の馬

平成26年1月2日(木)～3月9日(日)

中村 淳子



千支の一番人気

郷土玩具収集家の山崎茂さんから平成22年に当館へ寄贈された約1万2千点のコレクションには、数多くの千支の玩具があります。

12種の動物がいる千支物は、収集家心をくすぐります。ひとたび集めはじ



親子うま 奈良井土鈴 (長野県)
山崎茂さんの収集品。ポスター・チラシの写真是製作者の中西康二さんから寄贈された仔馬の色が違うもの。

めると十二支をコンプリートしたくなりますし、さまざまな産地や作家の千支物に触手が伸びてゆきます。十二支が一巡しても次のシリーズがつけられると、集める楽しみは続きます。

そのようにして収集された山崎さんの千支物の中でも、特に多いのが馬の玩具です。

そこで、いつもは常設展のコーナー展としてご覧いただいている「千支の玩具展」をパワーアップし、企画展示室を牧場に見立てて、馬の玩具をご紹介します。

年賀切手になった馬

郷土玩具には、その土地その土地の特徴があらわれています。見る人によってさと思っておこさせ、年賀切手によく似合う題材です。

平成26年の年賀切手には、中山人形土鈴春駒(秋田県)と琉球張り子の



チンチン馬(沖縄県)、のこみ人形の稲荷駒(佐賀県)が描かれています。

さて、その中で山崎さんのコレクションにはチンチン馬がありました。山崎さんは日本各地の郷土玩具の産地を訪ねておられました。沖縄県には行ったことがないとおっしゃっていました。けれど、沖縄県の玩具もたくさん収集されています。

もともと山崎さんは切手収集家で、玩具収集のきっかけは昭和43年の年賀切手に描かれた登り猿(宮崎県)でした。年賀切手の発行が発表されると、ご自身のコレクションに題材となった郷土玩具があればよし、無ければ早速手に入れるようにしていたそうです。

コレクションには、年賀切手になった玩具のほとんどに1枚ずつ年賀切手が添えられています。

年賀切手にはじめて郷土玩具が描かれたのは、昭和29年(1954)の三春駒(福島県)でした。三春駒は郷土玩具界では有名な木馬で八幡馬(青森県)や木下駒(宮城県)とあわせて「日本の三駒」と呼ばれています。その後、馬の年賀切手は昭和41年の忍び駒(岩手県)、昭和53年の伏見人形の飾り馬(京都府)、平成2年の八幡馬(青森県)と浜松張り子の飾り馬(静岡県)、平成14年の稲馬(新潟県)と吉良の赤馬(愛知県)と続きます。みんな牧場にいるので探してみてください。

チンチン馬(沖縄県)
琉球の王さまが競馬へ行く姿。ヒモをひいて動かすと、ピンピン音がして馬が首をふる。チンチン馬グーともいう。琉球張り子の個性的な色は、琉球紅型にも通じているようだ。



コトコト馬（岡山県）
子どもや若者が小正月に家々をまわって持っていったワラ馬
コトコトは雨戸や縁側をたたく音だよ



手向山八幡宮の立絵馬（奈良県）
絵馬の古い形を伝えるという神社の授与品だ



チャグチャグ馬コ（岩手県）
農耕馬に感謝するチャグ
チャグ馬コ祭りの馬玩具
チャグチャグは鈴の音だよ



ピンピン馬（滋賀県）
痲瘋よけとして男の子に贈られた
車をひくとピンピン音がするんだ



浜松張り子の飾り馬（静岡県）
平成2年の年賀切手のモデル
青い眼がメルヘンだね



安芸土鈴（高知県）
名馬を買って夫の出世に一役
かった山内一豊の妻のお話から
つくられたんだ

日本各地の
馬の玩具が
おもちゃの牧場に
集まってくるよ



展示案内キャラクター
こうちくん



大山の竹馬（鳥取県）
子どもがまたがって
遊んだんだよ



きじ馬（大分県）
イギリスの陶芸家
バーナード・リーチが
ほめた九州の木地玩具



名古屋土人形（愛知県）
郷土玩具の馬は武者や花嫁、キツネ
いろいろ乗せてるよ

馬に願いを
いろいろな願いごとやお礼として生きた馬を神社に奉納していたものが、板に描いた馬を代わりに納める「絵馬」になったといわれます。
牧場には、絵馬の昔の形を伝える手向山八幡宮の立絵馬（奈良県）、縁結びの忍びの駒（岩手県）、子どもが健やかに育つように疫病神を払うピンピン馬（滋賀県）など人びとが願いをこめた馬の玩具が集まっています。
美しい鞍具を付けて祭りに登場する飾り馬や、小正月や七夕行事のワラ馬は、各地のものがあるので見くらべると楽しいですよ。
おもちゃの牧場では、郷土玩具と、行事や祭りのパネルを展示して人と馬の豊かなかわりをご紹介します。

歴史館の展示案内キャラクターのこうちくんも、今回は馬のかわりで、パネルの他、クイズやパズル、お絵かき、ふれあいコーナーなどをご案内します。

ぜひ、歴史館のおもちゃの牧場へ、かわいい馬の玩具に会いにきてくださいね。

土佐には こんな馬がいた

来年の干支「午」にちなんで考古・歴史・民俗3分野の
学芸員がいろいろな時代の土佐の馬をご紹介します



展示案内
キャラクター
こうちくん

土から出てきた土製の馬
昔の絵や古文書に記された馬 絵葉書になった馬
行事や言い伝えに出てくる馬…
こうして調べていくと 土佐では
昔はもっと馬が身近だったことがわかるんだね



古代・土佐の土馬祭り

岡本 桂典

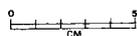
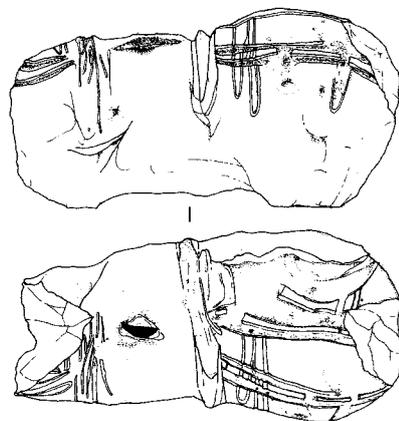
馬は古くから信仰と関係した動物でもありました。希に工事や発掘調査などで土で作られた馬の形をしたものが見つかることがあります。これを土馬と呼んでいます。

土馬とは土製の馬形のことです。大きさが10〜20cmほどあります。手捏ねで作られたものも多く、全国から出土しており、高知県内でも3点見つかっています。焼成された状況により土師質(土馬)と須恵質(陶馬)に分けられます。また、形状により裸馬と飾馬に分けられています。土馬は5世紀〜10世紀にかけてみられ、墳墓や神社、集落、国衙、井戸などから出土しており、水霊信仰との関わりが考えられています。

土佐で見つかった土馬について見てみることにしましょう。陶馬の裸馬が四万十市古津賀の後川から採集されていますが、正確な採集地はわかりません。採集者は堀内和郎氏です。高さは12・1cmで、飾りなどはなく、時期は奈良時代中期ころと推定されています。安芸市川北乙江川からも陶馬の飾馬が出土しています。

もう一つは、発掘調査で出土したものです。残念ながら二次的に堆積した層から出土したものです。場所は、南国市岡豊町小蓮字山崎です。現在の

高知大学医学部敷地内になります。高知医科大学(現高知大学医学部)が建設される前に発掘調査がなされていたのです。塚状に盛り土された泥砂の中から、近代の物と共に須恵器の破片と陶馬が確認されています。国分川の支流の一つ山崎川をさらえた時に盛り上げたものかもしれません。須恵器は坏・高坏・甕・瓶の破片で、7世紀後半のものと考えられています。飾馬は肩から尻まで15cm、鞍の部分で径6・2cmあります。頭、首、足、尻尾はありません。祭祀行為の一つが終了した時点で、須恵器や飾馬を割り川に投げ込んだものと考えられます。雨乞いか、水に関係する祭祀を行なったのかも知れません。この飾馬は、残念ながら現在行方不明です。

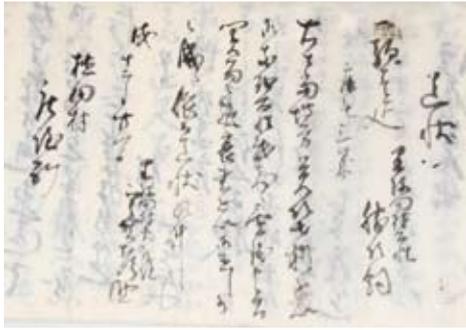


陶馬 南国市岡豊町小蓮山崎出土
〔土佐史談〕152号 1980年より

百姓たちと馬の売買

大黒 恵理

写真は里改田村（現南国市）の字賀家に残された「諸御用差出并掛合書控」（文久二年（1862））の一部です。里改田村の百姓・勝次が植田村の百姓・武右衛門に鹿毛3歳の馬を売り渡したときの記録で、博勞・覚次がその仲介をしたことが書かれています。博勞とは馬の売買やその仲介をする業者のこと。本史料にはこのような記録が15件見られ、百姓たちの取引のようすがうかがえます。



「諸御用差出并掛合書控」
（字賀家文書、南国市立図書館蔵）

記録によると、取引されている馬の毛色は鹿毛が6件と最も多く、ついで栗毛・黒毛が各3件、青毛・月毛・

黒鹿毛が各1件とさまざま。

年齢は6歳が5件と最多で、2歳から4歳の馬も見られます。

売主は全



士佐国職人絵歌合「博勞」（高知市立市民図書館蔵）

て里改田の百姓で、買主は植田のほか、十市・下大埦・衣笠・比江・山田野地・物部・野市など里改田周辺の村の百姓がほとんど。ときには「御国馬」として藩の役所へ納められたこともあったようです（4件）。馬の値段が記されていないため、いくらかで取引されたのかが分からないことが残念ですが、里改田で馬の生産が盛んに行なわれ、それが百姓同士で取引されていたことが分かります。馬借に使われたり、番所に備えられたり、百姓の農閑期の駄賃稼ぎに使われたりと、馬は様々な用途で物資の輸送に関わり、人々の暮らしを支えていました。武士だけでなく、庶民にとっても、馬は生活になくてはならない存在だったのです。

土佐の馬の民俗

梅野 光興

かつて高知県内でも馬は全域で飼われており、農耕や運搬に大きな力を発揮していました。スキヤ馬鍬という道具を引っ張って、人間の何倍もの能率とパワーで田を耕したり、背中に荷を積んだり荷馬車を曳いたり、トラクターや軽トラクの無い時代、馬は大活躍でした。『三原村史』は、馬を何頭も並べて田植の準備作業の「代掻き」を行なった時の様子を「まさに勇壮そのもの、テレビなどで見る騎馬武者が敵陣への切り込みにも喻うべきほどのものであった」とその迫力を記しています。

高知市では5月15日を馬の節供（あるいは牛の節供）とも呼んで、馬を飼っている家で輪注連を門に飾る所もありました（桂井和雄「土佐ノツゴ考」『土佐民俗記』所収）。また、馬の急な病気は妖怪のしわざとされてきました。高知市土佐山では、ダイバは馬が山道を行く時つきまとう怪で、突然砲音のように鳴り渡ると同時に肛門が抜けて役立たぬようになると言います（桂井和雄「山の妖

物と怪異」『土佐民俗記』所収）。かつて道行く牛馬に鈴をつけていたのも、その音でダイバなどの妖怪を避けるためでもありました（桂井和雄「山村民具の話」『耳たぶと伝承』）。

このように生活に密着していた馬ですが、県内すべての村に同じようにいたわけではないようです。江戸時代の寛保三年（一七四三）の資料をみると、現在の物部村には、牛は五八〇頭いますが、馬は三頭だけです。一方、三原村では牛八六頭に對し、馬が三三八頭に馬の方が多く、牛を飼っていないかった集落も五つあります。どうやら、県西部に馬が多く、県東部には牛が多い傾向がありそうで、この違いは他の民俗にも影響を与えていると思われます。



東洋町では今も流鏝馬が行なわれている
（名留川春日神社）2013.10.21

考古

御霊代の壺―焼畑大地の神―

本年度の秋から冬にかけて、高知・岡山交流事業Ⅱ特別展「備前焼」が開催され、その中で土佐に搬入された備前焼についても取り上げました。そこでどうしてもふれておきたかったことがありましたが、展示ではとりあげられなかったことがありました。それは山間地域の備前焼の壺の存在です。

かつて、学生の頃に土佐の山間地域を調査した時のことです。村史の調査の時と記憶していますが、ある小さな神社を拝観した時、中に備前の壺が祭られていました。当時は不思議に思いましたが、後に種壺であることがわかり、それ以来ずっとそのことが記憶に残っていました。



須崎市押岡土居の谷遺跡の
銭貨を納めた備前壺

られ、ヒエが納められたものもあります。そこに何か共通点があるような気がしてなりません。

(岡本)

歴史

土佐駒のイメージ

徳島県阿南市などには、長宗我部氏の軍勢がヤギのような六本足の小馬に乗って攻めてきたという伝承があります。これは土佐の原産馬「土佐駒」を評したものと思われまます。

近世以前より土佐には各地に牧場があり、馬の生産が行われていました。長宗我部元親の時代には、多くの土佐駒が戦の他、平時には荷物の運搬等にも使用されたことでしょう。

諸史料によれば、土佐駒は、背が低く小柄の割には蹄が強いとされ、登坂能力に優れていたといえます。一方、平地を疾走する力は劣っていたので騎馬武者同士の戦いでは不利だったようです。

大坂夏の陣に参戦した長宗我部盛親の旧臣・上山十兵衛は、敵将・藤堂高虎に肉薄しながら討ちもらしてしまいました。その理由を「高虎殿の馬は南部駒の俊足なのに対し、自分の馬は短脚なるが故である」と後に述懐しています。



明治期の絵葉書「斗賀野医師山崎氏の愛馬」② 嶋崎誠氏蔵

ぼろげながら土佐駒のイメージが湧いてきますね。(野本)

(1)馬の背が低い
ため、人間が乗る
と6本足に見えた
ようです。
(2)専門機関によ
れば原産馬の可能
性がある貴重な写
真だそうです。

民俗

幡多の祭りと芸能

来春開催予定の三原村の民具や民俗をテーマにした企画展の準備の一環で、一昨年からは幡多地方の秋祭りを見に行っています。驚くのは知られていない村の芸能がまだまだたくさんあることです。もちろん、主要なもの



宿毛市山田八幡宮の秋祭り



四万十市大用の花取り踊り

個々の芸能の歴史がわかってくるのではと期待されます。ただ、奉納日は日曜日が多く、日程が重なるので実際に見に行けるのはごくわずかです。「今年からやめました」「再来年はわかりません」という声も耳にしました。気持ちにはあせるのですが…。

(梅野)

土佐最古の紀年銘をもつ板石塔婆を 歴史館資料調査員が発見

四国霊場26番札所金剛頂寺で、土佐で最も古い嘉元三年（1305）銘の板石塔婆を2010年に濱田眞尚氏（現副館長）が発見し、資料調査員の林勇作氏が拓本をとり嘉元三年の年号や他の銘文を確認しました。2013年11月20日に金剛頂寺において坂井智宏住職と歴史館がマスコミに公表しました。高さ2m30cm、幅66cmの砂岩製の自然石塔婆で、五智如来の梵字を刻した貴重な板石塔婆であることがわかりました。



金剛頂寺 石造塔婆拓本
(嘉元3年銘 林勇作氏拓本)

岡山高知文化交流事業展

「土佐の水とくらし」

「四万十川の漁を中心に」開催間近!!



岡山県立博物館で高知県の民俗文化をテーマとした展覧会が開催されます。昨年からはじまった岡山高知文化交流事業の一環で、四万十川の漁具など当館の収蔵資料も展示されます。先日、岡山県立博物館の信江学芸員が資料調査のために来高されました。高岡神社へのごあいさつに四万十町へ同行した当館学芸課長は同町に関連が深く、信江学芸員に四万十川流域の暮らしをお話し、理解を深めていただきました。展示は来年1月1日からです。岡山県で多くの方にご覧頂き、高知県の魅力を知っていただきたいと思えます。

(中村)

カルチャーサポーターの活動

張り子馬の絵付を練習しました



当館のボランティア「カルチャーサポーター」は、ワークショップのサポートを中心に活躍しています。参加者のサポートは、自分がよくわかっていないとできません。そのため必要に応じて事前に研修しています。馬張り子の絵付のワークショップに備えて、11月10日に草流舎の田村多美さんのところへ練習に行ってきました。実際にやってみると難しいところや大事な点がわかり、当日のサポートで大いに活かされたそうです。

(中村)

イオン高知のワークショップで焼き物にチャレンジ!!



高知県文化財団の文化施設がイオン高知でワークショップを実施しています。当館は10月20日に特別展「備前焼」にちなみ「焼き物に親しもう」を行ないました。オープン陶土を使った形作りを会場で体験していただき、後日、乾燥・焼成した作品をお渡ししました。作品は、端整な皿や小鉢、クッキーの型を使ったかわいい箸置き、自由に手ひねりした恐竜や宇宙人など力作揃いでした。参加したみなさんからは、「すごく楽しかった」「いい経験になった」といった声が寄せられました。

(中村)

図録

『高知・岡山文化交流事業Ⅱ
特別展 備前焼
—薪と炎が織りなす土の美—』

岡山県立博物館蔵の備前焼優品、土佐の備前焼出土・伝世資料、他コラム備前焼播鉢の制作など収載。

オールカラー、A5版、104頁、
1,000円（税込、送料290円）

- 第1章 日常容器の世界
—つぼ・かめ・すりばち—
- 第2章 土佐に来た備前焼
—川をのぼり、山を越えた備前—
- 第3章 美と技を求めて
—徳利・お茶・細工—
- 第4章 重要無形文化財保持者（人間国宝）の作品

バックナンバーのお知らせ

『高知県立歴史民俗資料館
研究紀要』第18号

土佐の出土銭貨2

—須崎市押岡土居の谷遺跡—
..... 岡本桂典

寺石正路資料調査報告Ⅲ
寺石正路自叙伝『燈下與児談』上
..... 野本 亮

[資料調査員報告]

浦戸湾の和船

—和船の建造を試みる方のために—
..... 芝藤敏彦

A4版、102頁、1,500円（税込、送料340円）

岡豊風日（おこうふうじつ） 第84号
平成25年12月1日
編集・発行 高知県立歴史民俗資料館
〒783-0044 高知市岡豊町八幡1099-1
TEL 088(862)2211
FAX 088(862)2110
午前9時～午後5時
開館時間 年末年始12月27日～1月1日
休館日 臨時休館あり
観覧料 通常期（常設展）大人（18才以上）
450円・団体（20人以上）360円
（特別展・企画展常設展示込500円）
団体（20人以上）400円
無料…高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・障害者手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者（1名）
印刷・川北印刷株式会社

http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~rekimin/
Eメール：rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp

平成26年 1月～3月の催し

企画展

おもちゃの牧場 —干支の馬—

2014年 1月2日(木)～3月9日(日)



期間中
いつも

山崎茂さんの郷土玩具コレクションを中心に干支にちなんだ馬のおもちゃを展示します。新春は、おもちゃの牧場にぜひお越しください。

- おもちゃの馬の絵をかこう
かいた絵を期間中展示します
- 馬のおもちゃクイズ
馬のおもちゃカードをさしあげます
- ホースマップパズル
馬のおもちゃの日本地図を作ります



下川原焼（青森県）

展示室トーク ●予約不要・観覧料要（講師：担当学芸員）

1月11日(土) 14:00～14:30 1月18日(土) 14:00～14:30

コーナー展

昔のくらしの道具



2014年1月2日(木)～2月24日(月)

ハガマ、おひつ、アンカ、炭火アイロン、洗濯板…、昭和の香りのする民具たちです。小学校の昔の暮らしの授業にもピッタリ!

コーナー展

おひなさま

2014年2月2日(日)～3月16日(日)

ほのぼのかわいい郷土玩具や大正・昭和時代の雛人形を展示します。



安芸土鈴（高知県）

ワクワクワーク ●電話等で要予約（先着30名）観覧料要

2月15日(土) 14:00～15:30（参加費用：1,200円）

「土佐和紙雁皮張り子 雛の絵付」 講師：草流舎のみなさん

展示室トーク ●予約不要・観覧券要（講師：担当学芸員）

3月1日(土) 14:00～14:30

予告

企画展

つばき ひめ
椿姫の里・三原

2014年4月26日(土)～6月15日(日)



椿姫の伝説が伝わる四国西南端の村・三原の豊かな民俗文化を、2009年から実施している県立大との民具・言語調査の結果をもとに紹介します。

オサバイ様を祀る